

【論 説】

経済学とアナロジー ——経済機構をつくる個人とは何か——

山 崎 弘 之

目 次

- 1 アナロジーとは何か
- 2 経済学は全体論を要請する
- 3 経済学は演繹を要請する
- 4 メンガーのアナロジーと演繹
- 5 メンガーの個人主義は社会的演繹
- 6 ハイエクのアナロジー
- 7 アナロジーという方法の意義
- 8 結語

1 アナロジーとは何か

社会科学も自然科学も方法論が存在する。その方法のなかで帰納法に劣らず用いられてきたのが、アナロジー（英 analogy, 独 Analogie, ギ αναλογία）という方法である。アナロジーとは日本語では推論や類比と訳される。あるA事象（包括と被包括との関係）に基づき、もう一つのB事象（包括と被包括との関係）に推論を施すことである。したがって、数学の比に相当するので類比とも言う。帰納法や演繹法に比較してアナロジーという方法は日本人になじみのない方法と聞こえるのではないか。しかし帰納法や演繹法に劣らない科学の方法である。西洋哲学を辿ってみると、アナロジーは古代哲学まで遡る。自然科学者であろうと社会科学者であろうと科学者すべてにとって、アナロジーという方法は疎かにできない方法と言えよう。

とりわけ社会科学においてアナロジーは必要である。その理由は形式論理

経済学とアナロジー（山崎）

学における帰納法や演繹法とは異なる方法であるからである。前者は特殊から普遍へ、後者は普遍から特殊へと進む。しかし、アナロジーは特殊から特殊へと進む。もとよりその意味で必然性や確実性を目論むことはできず、蓋然性を求める。しかし、所詮社会科学に必然性や確実性を求めることなどできない。したがって、人間行為の世界、実践（意志や自由）の世界ではアナロジーが有効に働いてきた歴史を持つ。その例は法律の世界に見られる。むしろ社会科学の世界では多くの困難な問題を抱えているがゆえに、帰納法や演繹法によらずアナロジーが有効に働いてきたと言えよう。カントは言う。「すべての経験的実在性は、その最高で必然的な統一を、この理念の上に基礎づける。そして、われわれはそのことを、理性法則によってすべての物の原因である現実の実体との類推（Analogie）による以外には、考えることができない。」¹⁾ 社会科学においてはアナロジーは有効な思惟方法を担って社会に貢献してきたと言わねばなるまい。これから見るように、メンガー、ケインズそしてハイエクがアナロジーを扱ってきた。社会的演繹²⁾、全体論はアナロジーがその担い手となっていたことを知らねばならない。

ここで断っておくことができる。われわれ人間は帰納法にしても演繹法そしてアナロジーにしてもこの名称や方法の内容を詳しく知らなくても、その方法に基づく判断を下しているのである。ちょうどホルモン剤の薬に似ている。ホルモンは抗生物質とは異なり、人間に備わっているものである。ホルモン剤は体内の自然な発生量に加担させて病気を克服しようというものである。オキシトシン（これまで医者や医学者の薬である出産誘発剤）は今や医者のみならず脳科学者や社会科学者に広く取り上げられてきた³⁾。アナロジーも脳内に存在するホルモン、思惟方法の一つである。換言すれば、このホルモン剤に似て、帰納法、演繹法そしてアナロジーを知らずともわれわれ誰もが用いている方法である。ならば、あらためて論じる必要はないのではないかといぶかる向きも出てくる。しかし、それらの違いや特色を知ることによって科学の方法を適切にそして確実に進められるというものである。科学方法論はちょうどホルモン剤に似て、人間が潜在的に持っている能力を適切

に高めようというものである。ハイエクが掲げた共感覚（synaesthesia）⁴⁾に繋がるものである。しかしホルモン剤の調節が難しいように、政策の方法となれば難しいことも同じである。ここに議論する意味がある。

もう一つ断っておくことが必要である。それはカントがいみじくも分類したように、科学の方法は認識に加えて道徳や判断が必要である。科学者である限りこれらどれ一つとっても疎かにできない。とりわけ社会科学者は判断が必要である。なぜなら判断には前二者が自然に溶け込んでいるからである。そして社会科学の対象は人間が作り出した果実が対象であるからである。経済学が財をつくり法学が制度をつくる、それらは判断の結果であり、直接人間が関わりを持つ。つまりあくまでも人間が対象となる。これは自然科学と実に対照的な相違である。

そして、このような言説を丁寧に議論してきたのがメンガー、ケインズそしてハイエクであった。彼らは経済を抽象化せずリアリズムに議論してきた。そして、それを支えるべく彼らは哲学に造詣が深い経済学者であった。その表れは彼らが共にアナロジーを扱っていることにある。

まずアナロジーについて、ヒュームの言説から述べることにする。

「事実の問題に関する我々のあらゆる推論は、一種の〔類比〕（Analogy）に基づいている。そして類比は、いかなる原因からでも、我々がそれまで相似の原因から生じるのを観察してきたのと同じの出来事を期待するよう、我々を導くのである。原因が全く相似している場合には、類比は完全である。そしてそれから引き出される推論は、確実で決定的であると見なされる。」（Analogyは大文字で原文通り）⁵⁾

しかしながら、ヒュームは他方でこうも言う。

「…我々は、我々の理論の最後段階に到達する遙か以前に、仙境に踏み込んでいるのである。そこでは我々は通常の論議の方法を信頼し、あるいは通常我々が用いる類比や蓋然性に、何等かの権威があると考える何

経済学とアナロジー（山崎）

の根拠も持たない。」⁶⁾

「類比，経験，および観察からの推論によって，自然現象を産出する諸原理を一層単純化し，多くの個別的な結果を少数の一般的な原因に換言することは，明らかに人間理性が最大の努力を傾注するところである。しかしこれら一般的原因の更にその原因に関しては，我々がそれらの発見を試みても無益であろう。…道徳的あるいは形而上学的哲学の最も完全なものも，おそらくは無知の一層大きな部分の発見に資するにすぎないであろう。」⁷⁾

ヒュームという同一人物が述べているにしてはあまりにもかけ離れていて，矛盾ではないかと思わせる。しかしながら懐疑論を携えたヒュームならではの主張とも理解できる。そして人間の思惟における不確実さという点でまさにリアリズムな言明である。われわれ人間の判断に可能性と懐疑が同時に宿っていることは紛れもない事実である。そして，社会的判断はそう簡単には結論が出ないのである。しかしながら，無知であるがゆえに人々には社会的演繹が生起する。人々がもつ具体的情報に基づきアナロジーが進む。そこでは原因よりも結果である。換言すれば，アナロジーには前向きの姿勢が含意される。

さらにヒュームの言説からアナロジーの基本的性格を確認しておこう。アナロジー（類比，類推）は経験と主観の共同作業を含意する⁸⁾。なぜなら，類比（類推）できるのは二つの事象もしくは二つの命題間で一方から他方を判断する場合である。これは過去の経験に基づいている。しかし同時に類比（類推）は主観に基づく。ケインズが命題間の関係に「蓋然性」を見出し，合理的な判断と呼んだのだが，その合理性には主観が関わるからである⁹⁾。合理的な理解，合理的な判断はまさにその主観のなせる技である。

しかしながら，合理的信念の度合いにはイギリスの伝統だけではなくヨーロッパが抱えてきた大陸の思想に関係していたと言えよう。むしろイギリス経験論の対極にあるのが合理論である。後に詳論するように，ケインズは蓋

然性を大陸哲学（とりわけドイツの主観哲学）の合理論の立場を入れて、合理的な信念の度合いとしたと読み取れる。これは歴史的に見てイギリス人としては画期的なことではないか。

これとは逆に、メンガーが課題としていたのはイギリスの経験論である。メンガーの思想土壌は自ら述べていたように、ドイツ哲学である。それを高めるために、イギリス経験論を積極的に取り入れようとした。対照的に、ケインズは自らの経験論の土壌を高めるためにドイツの合理主義を積極的に取り入れようとした。果敢的であることにおいて同様であるが、誠に対照的である。ともに更なる科学性を求めて逆な立場から頂点を目指すこととなったと理解できる。したがって、両者に一致するべき帰着点は見えてくる。結論を先取りすることになるが、その方法の帰着点は全体論や社会的演繹である。もとより、ケインズに演繹という言い方は見当たらない。イギリス経験論の土壌に生きていたからである。ケインズが展開していた「蓋然性論」はメンガーやハイエクが基礎にしている演繹に通じるのである。

アナロジーがもつ性格は前向きな姿勢であった。それは個人がもつ主観の位置を確認するに通じる。それは具体性に富んでいた。換言すれば、それは経済学が抱える運命を担うに何ほどかの意義があったからである。

2 経済学は全体論を要請する

経済学者の多くが軽んじていたことが一つある。それは、経済が一つのシステムを演じているということである。もとより、システムということは誰もが形容する言葉である。しかし、スミスがいみじくも「見えざる手」に気づいたにも拘わらず、そのシステムは全体論という機構であるという議論にはなかなか至らなかった。この点を理解して経済学を展開してきた人は実に少ない。経済学も科学として細分化され、財が焦点になり自然科学と同様に因果律にのみ意義を求めてきた。因果律を進めれば進めるほど経済学に限界があることに気づきにくくなっていった¹⁰⁾。

この傾向に反旗をひるがえした経済学者は実に少ない。その旗を振った経済学者はメンガー、ミーゼス、ハイエクそしてケインズを挙げたい¹¹⁾。そして、結論を先取りすることになるが、彼らに共通項として言えることは、過去の哲人を意識して経済学を展開していたということである。

経済というシステムは敢えて取り上げなくても全体論に立たざるを得ない。なぜなら、経済に生きる人間は誰もが個人的により豊かにならんとする。いわゆる誰もが経済人である。しかし、その個人でさえ相手がいることであり、その相手が豊かにならざることなく自らが豊かになり得ないことを熟知している。ゼロサム・ゲームは誰も望まないし、あり得ない。経済という機構は時間と空間の制約はあるものの、ゼロサム・ゲームが消失する世界である。つまりそれがスミスの言う、「見えざる手」の世界である。もし一個人だけが得をすとしても、それは続かないことは誰もが知っている。企業が景気の良し悪しを視野に入れていることからわかるように、経済の視野はわれわれが未知とする場所と未来に及んでいる。換言すれば、経済は時間と空間を超えてウイン・ウインの世界である。要するに、経済はとりわけ期待を含意する。個人も同様である。そうでなければそもそも交換などあり得なかった。

もとより、ウイン・ウインの世界を獲得したというのではない。ウイン・ウインの世界は存在するが当為の世界と理解せねばならない。財の生産と同様に経済は構築の世界である。換言すれば、全体論の世界である。その意味において、経済学は他の社会科学に比較してこの全体論が強く意識されてきた科学である¹²⁾。ならば、その自然な姿を構築するべく従おうではないか。まずケインズを見てみよう。

今となっては周知のことであるが、政策において価格の変化ではなくして所得の変化から接近するという手法を採ったのはケインズである。彼の『一般理論』はまさに経済学に新風を吹き込んだのである。古典派経済学を批判してのことであった。それはマクロ経済学の始まりとして定着した。つまり戦略変数を価格から所得（総生産）に移動させたのである。ケインズの主張

はあくまでも総需要を産み出す所得を戦略変数としたことにある。いわゆる、マクロ経済学の誕生である。

しかしながら、これまでの説明からするならば、このマクロ経済学は少々響きが異なってくる。ケインズの所得を経由した体系論はある種の演繹であり、全体論と言えよう¹³⁾。彼のマクロ経済学の発生や起源について、多くの経済学者は同時代の経済学者に見いだそうとしてきた。確かにそれも言えないこともない。しかし筆者にしてみれば、ケインズ自らの哲学的センスから見いだしたものであると思わざるをえない¹⁴⁾。いわば、マクロ経済学は起こるべくして起こった理論と言えよう。その根拠は彼の唯一の哲学書『蓋然性論』に現れている。つまり、ケインズの土壌たるケンブリッジ学派やイギリス正統学派から判断して、彼のマクロ経済学の基礎はむしろスミスや哲学者・ヒュームにあったと考えた方がより正しいのではないか。ケインズという経済学者は経済学が他の社会科学に比してもつ特徴をよく理解していたからではないか。

まず彼のマクロ経済学の核心を表現する箇所を見よう。『一般理論』のフランス語訳の序文で次のように述べている。

「私は自分の理論を一般理論と呼んだ。その意味は、私が主として扱うものは個々の産業や企業や個人の所得、利潤、産出量、雇用、投資、貯蓄といったものではなく、総所得、総利潤、総産出量、総雇用、総投資、総貯蓄といった全体としての経済体系の動きであるということである。…上に述べた貯蓄と投資の均衡関係は全体としての体系について必然的に成立するが、特定の個人についてはまったく成立しない、ということである。…一個人の所得を彼自身の消費や投資から独立であるとみなすのは、きわめて妥当なことである。しかし、指摘しておかねばならないが、そうだからといって次の事実を無視してはならない。すなわち、一個人の消費や投資から生ずる需要は、他の諸個人の所得の源泉であって、したがって上述のこととは逆に、全体としての所得は諸個人の

経済学とアナロジー（山崎）

支出や投資の性向から独立ではないのである。…これについてはいかなる理性的疑義をさしはさむ余地ももたないのである。正しく理解するならば、このことは平凡な結論である。しかし、それはいっそう重要な問題を生む一連の思想の展開をもたらすのである。」（ルビは筆者）¹⁵⁾

まず、後半の部分、「一個人の所得を彼自身の消費や投資から独立である」と考える、と「一個人の消費や投資から生ずる需要は、他の諸個人の所得の源泉」である、の二つの叙述である。ケインズのマクロ経済学の核心は需要不足にあることは周知の通りである。つまり、一個人の所得から消費や投資を考えるのではなく、諸個人の需要の構成に力点がおかれている。総体としての需要（消費と投資）に焦点が当てられている。確かに不況を打開するための施策として需要不足が唱えられるのだが、一個人の意思決定とは独立に需要の構築という思想が描かれている。これはメンガーの「熟慮されたわけではない結果 (unreflektirte Ergebnisse)」(「意図されない合成果 (unbeabsichtigte Resultante)」とも言う)¹⁶⁾、もしくはハイエクの「志向せざる、もしくは意図せざる結果 (unintended or undesigned results)」¹⁷⁾ という立場に通じるものであろう。ここに全体論が現れていると言えよう。

要するに、経済学は他の社会科学に比して、全体論が相即不離の関係で表面化するのである。もとより、価格を無視した議論をしているわけではない。価格は直接規制されるのではなく、全体論の中で規制されるのである。つまり価格は一人個人が決めるのではなく、諸個人が決めている。つまり、全体論として、ケインズなら完全雇用、メンガーなら福祉そしてハイエクなら秩序へ目的論的に価格は自ずと調整されるのである。

しかしながら、個と全体すなわち個人と経済機構とがどのような関係にあるのであろうか。この全体論を展開するに当たり、メンガー、ケインズそしてハイエクが共有していた方法がアナロジー (analogy) であった。次に哲学が抱えていたアナロジーはどのようにして経済学に援用されたのか、見てみよう。

3 経済学は演繹を要請する

既述のように、経済学は全体を見渡さざるをえない社会科学であった。すなわち全体論であった。この全体論はより理解を進めようとするなら演繹と言い換えてみる必要がある。そうすると全体論の経済学と演繹の哲学と分れてしまう恐れがある。したがって、全体論は社会的な演繹としてみる必要がある。

近代経済学は別名限界革命と呼ばれてきた。それは価値を貫く裏付けが労働から効用に変遷したことに大きな理由があった。しかしながら周知の通り、その効用を基盤とする価値を積み重ねても経済全体の規模を描くことはできない¹⁸⁾。効用は測れない。周知のように、ケインズが『一般理論』を上梓した理由の核心は古典派経済学（画一的な個人の設定）を批判してのことであった。その結果経済学はいわゆるミクロからマクロではなく、マクロからミクロへ、視点の転換をもたらした。この点で、筆者はクラウアー（Clower, R.W.）やレイヨンフーブヴド（Leijonhuvud, A.B.）のケインズ革命を支持したい¹⁹⁾。もとより、その対岸に新古典派総合の経済学者・サミエルソン（Samuelson, P.A.）やヒックス（Hicks, J.R.）がいた。

これを哲学的に裏付けておこう。ケインズが哲学者・ムーアから学んだ「合成の誤謬（fallacy of composition）」²⁰⁾ や「有機的統一の原理（organic unity）」²¹⁾ という言説は、経済と個は所詮乖離したものであることを端的に表している。個人はあくまでも主体性をもちつつ、かつ客観性を構築しているという主張である。しかしながら、これらには完全な乖離が存在する。では、個と経済とに乖離を認めつつなお個物主義（個人主義）²²⁾ が貫かれる理由はどこにあるのであろうか。

ケインズの演繹（もとより彼が演繹という言葉を用いているわけではない）を辿ってみよう。彼がケンブリッジ大学のキングス・カレッジのフェローシップ（特別研究員）の申請論文（1907年）²³⁾ に現れていると言えよう。

経済学とアナロジー（山崎）

これを基にケインズは『蓋然性論』（*A Treatise on Probability* 1921）²⁴）を上梓したのである。ケインズは24歳にして演繹を自らの思想としていたことが分かる。ケインズは単なる経済学者ではなく、哲学者であったとすることができよう。『蓋然性論』は彼の哲学を語る唯一の本であるが、後の経済学を支えたことだけは間違いなからう。

その内容であるが、周知の通りイギリスは経験論の国柄、帰納法がどっかと腰を据えている。しかしながら、ケインズはそのイギリス経験論や帰納法に囚われず、演繹的な視点に気づいていたのである。既述のように、演繹という言葉は決して用いられているわけではない。しかし確実に現れている。それはアナロジー（推論、類比）として現れている。

ケインズは『蓋然性論』の冒頭で次のように説明している。

「確実なおよび確からしいという用語は、ある命題について、異なった量の知識がその命題に対してわれわれがもつことを正当と認める合理的信念のさまざまな度合いを表している。命題はすべて真もしくは偽であるが、それらの命題に関してわれわれがもつ知識はわれわれが置かれている状況による。…したがってその命題と関係させる知識をわれわれが指定しないかぎり、その命題を確からしいと呼んでも意義はないのである。」

「したがって、この限りで、確率を主観的と呼ぶことができる。しかし、論理学にとって重要な意味において、確率は主観的ではない。つまり、確率は人間の気まぐれに左右されるものではないのである。命題は、われわれがそれを確からしいと考えるから確からしいのではない。われわれの知識を限定する諸事実がひとたび与えられたならば、それらの状況において確からしいこと、あるいは確からしくないことは、客観的に決まってしまう、したがってわれわれの考えとは独立である。それゆえに、確率論は論理的である。なぜならば、確率論は、与えられた状況において合理的にもつことができる信念の度合いを扱い、合理的であろうとなかろうと単に特殊な個人の実際の信念を扱っているのではないから

である。』²⁵⁾

確率（蓋然性）は主観的と呼ぶことができるが、しかしそれだけでは不十分である。「確率（蓋然性）は論理的である」、そして「合理的にもつことができる信念の度合い」は、蓋然性は客観的でなければならないことを意味する。換言すれば、蓋然性は「われわれの考えとは独立である。」、すなわち諸個人にして社会的な普遍化を含意する。

したがって、ケインズが主張する蓋然性とは、決してそれを数値化する統計学上の確率を言うのではない。帰結される判断はいわば哲学が求める真理、善そして美を含意することとなる²⁶⁾。蓋然性はイギリスの伝統、経験論と帰納法に基づいて議論されているが、合理的な信念の度合は諸個人でありつつも個人の思惟に基づくとしたところにケインズの蓋然性の特色がある。ここに主観主義の立場を看過することはできない。思惟の確からしさに、ケインズはイギリス経験論が培ってきた帰納法に加えて、ややもすれば疎かにされてきた主観に分析を施しているからである。イギリスの経験論の伝統の中にいたケインズは異例の存在である。結果的に経験論の対極にあった合理論に理解を示すものとなったのである。

同時にケインズは客観的な蓋然性を主張する。これは演繹を語るものである。『蓋然性論』の「第三部 帰納と類比の第18章」で蓋然性論の核心が見えてくる。まずその類比（推論）について、ケインズは述べている。

「確率（蓋然性）は、論理学のなかの、合理的ではあるが確定的ではない論法（arguments）を扱う部分からなる、…そのような論法のなかでずばぬけて重要なタイプは、帰納の方法と類比（analogy）の方法に基づくものである。ほとんどすべての経験科学はそれらを頼りにしている。そしてまた日常生活の行為において経験により指図される意思決定は、一般的に、それらに頼っている。」（一部修正訳、ルビ、かっこ内は筆者）²⁷⁾

経済学とアナロジー（山崎）

では、何故「論拠のなかでずばぬけて重要なタイプは、帰納の方法と類比の方法」になるのであろうか。この中で帰納法は今更述べるまでもなく理解されるが、類比はそうではない。類比を理解していないのは日本人だけかもしれない。しかしながら、類比は古代哲学に起源をもつ思弁の方法であった。プラトンの有名な洞窟の逸話にあるように、自然が示す巨大さや偉大さからわれわれ人間の存在を推しはかることであった。

ケインズは述べている。少々長文であるが引用する。

「いま述べた著者（ジェヴォンズやラプラス）たちあるいはその他の著者はいずれも、厳密に解釈されたあらゆる帰納の妥当性は、事実の問題にではなく、確率関係の存在に依拠している、ということを明晰に理解することがほとんどなかった。帰納的論法（argument）は、ある事実問題がこれこれであると断言するのではなく、ある証拠に関してその事実問題を支持するある確率が存在するということを断言するのである。したがって、もし事実として本当はそうではないことが判明したとしても、もともとの証拠に対応した帰納の妥当性は無効になることはない。」
「この真理が明晰に理解されるならば、帰納的問題の解決にたいする姿勢は大いに修正される。帰納法の妥当性はそれを用いた予測の成功に左右されはしない。過去における予測の失敗の繰り返しが新しい証拠を提供するであろうことはいうまでもない。そしてその新たな証拠を含めることによって、その後の帰納の説得力は修正されるであろう。しかし旧証拠に対応する旧帰納の説得力は影響を受けない。過去における経験が提供した証拠が人を誤らせるものであったことは判明したであろうが、このことは、そのとき目の前にあった証拠からいかなる結論を合理的に導くべきであったかという問題とはまったく無関係であって、経験の問題ではない。現象界の実際の構成は証拠の特性を決めるが、それは与えられた証拠がいかなる結論を合理的に支持するかを決めることはできない。」（一部修正訳、かっこ内は筆者）²⁸⁾

これを見届ける読者は一様に蓋然性論に意外性や懐疑を抱くのではなかろうか。しかし蓋然性の本質は事実に対する確率、つまり近未来に起こる事実を当てることではない。あくまでも命題間に生じる合理的な判断なのである。その判断が事実を言い当てることに意味があるのではない。蓋然性の確からしきはわれわれの指定に限られている。この前向きな姿勢は具体性と目的性を含意している。つまり経験論を超えている。

自然科学のセンスに浸っている経済学者には失望感をもたらすであろう。そうすると、ケインズの蓋然性論の意義はどこにあるのだろうかと問わざるをえないだろう。だが、しっかりと意義は届けられる。社会科学は蓋然性が低いという消極的で曖昧なことに答えるのではなく、そもそも社会科学は客観性を重んじる、それは民主主義と合わせ持つ諸個人の構成、もしくは間主観が構成するものである。蓋然性の命題が合理的な判断として要請されることは演繹を意味する。筆者はこの演繹を社会科学の環境、共同主観と呼んできた。これはハイエクが求めた「自生的秩序」の思考環境²⁹⁾であり、ヒュームが言う社会³⁰⁾であり、カントが踏んでいた「第三の思考」³¹⁾である。

次にメンガーの見解を見よう。アナロジーを淵源として演繹へ進むその過程を見ることにしよう。

4 メンガーのアナロジーと演繹

メンガーは『経済学の方法』で「第3編 社会現象の有機的理解」と題して、アナロジー（Analogie 類比）³²⁾について詳しく論じている。しかしながら、タイトルを掲げての議論はむしろアナロジー（類比）を安易には取り入れてはならない慎重な議論となっている³³⁾。メンガーは述べている。

「社会現象と自然有機体との類比は前者の一部分だけにすなわち、歴史的発展の無反省的な社会現象だけにあてはまるにすぎない。…類比はけっして自然有機体と社会現象との本質の明確な認識からうまれたもので

経済学とアナロジー（山崎）

はなく、漠然とした感情からうまれたものであり、部分的にはまったく
外面的なものにすぎない³⁴⁾。」

メンガーはリアリストである。アナロジーを安易に受け入れてはいない。アナロジーは「無反省な社会現象」（「意図せざる結果」）の機構にのみ言えるという。アナロジーを完全に否定しているわけでもない。しかし、安易に自然有機体の機構を社会機構に移し替えて見ることはできないと厳に戒める。それはドイツ歴史学派経済学が経済機構を経験的（歴史的）対象として、自然科学と同様に見ていたことを厳に戒めることから出ている。安易に自然有機体と社会現象との類比を見てきたからである。

では、アナロジーという方法はどのような視点で必要とされたのであろうか。メンガーは続けて言う。

「わたしは自然的有機体と社会現象とのある類比が叙述の特定の目的には役立つことをけっして否定するつもりはない。…類比は研究の方法としては非科学的邪道ではあるが、叙述の手段としては社会現象の認識のある目的、ある段階については有用であることが証明されるかもしれない。」³⁵⁾

アナロジーから得られたものは目的の設定である。もとより、その目的は具体性よりも包括性で埋められることを示唆する。換言すれば、（形式論理学が言う演繹とは異なった）社会的演繹の契機を得ることになる。メンガーは言う。「こうした『有機的』解釈は自然科学からそのまま借りてこられてはならないのであって、社会現象の本質についての独立の研究結果であり、また社会現象の領域での特別な研究目標でなければならない。」³⁶⁾ この「特別な研究目標」が包括性に富んだ「人間の生命と福祉の維持」、ハイエクなら「自生的秩序」ということになるのは言うまでもない。こうして、「人間の生命や福祉の維持」は経済という全体に置かれた目的であった。アナロジーは社会的演繹をもたらした。

では、その社会的演繹に個人はどのように与していくのであろうか。包括

的恩恵に浴するの個人である。しかしながら、この目的は個人と直接結びつけられるものではない。なぜなら、個人が求める「人間の生命や福祉の維持」は主観に根ざして個別性が高い。それを経済学の名の下で、包括的に理解しかつ個人に向けて実現させていこうというのである。³⁷⁾

しかしこれは難問である。一足飛びに全体論が置かれるからである。換言すれば、生命や福祉の維持には規範が含意しているからである。メンガーはこの社会的演繹をまずは国家に任せる。政策を施すには国家でしかあり得ない。³⁸⁾ 個人はこの演繹論に入るべく、自由と制約の中にある。メンガーはこの全体論を『国民経済学原理』で次のように述べている。

「国民の個人財産の総体が国民財産だといっても差し支えないであろう。しかし国民財産の大きさが国民の福祉にたいしてもつ逆の関連が問題とされたり、あるいは個別経済どうしの接触の結果としての現象が問題とされるところでは、国民財産を文字通りの意味に解するならば、かならず多くの誤りを招くに違いない。」³⁹⁾

個人が享受する財産の総体が社会的かつ国家的な財である。しかし、その総体的経済と個人との間に国家とは視点を異にする社会的修正が待ち受けていることを示唆している。⁴⁰⁾

したがって、メンガーの（もし調整という言葉が使えるなら）調整は遙かに広く俯瞰的であり、社会的演繹である。それは哲学を含意したものとなる。なぜなら、福祉は主観に根ざしてばらばらである。それは演繹として包括的な構成を進めなければならない。それには国家と言うよりも社会が介入する。ハイエクはそれを秩序論として包括した。それはまた近世の哲学者達が用いた演繹と言うに相応しい方法に入らざるを得ない。いわば、カントの「目的無き合目的性」やポパーの「批判的合理主義」に基づく。

メンガーはこの論理を支えるべく、『経済学の方法』で次のように続ける。

「具体的な形態での法や国民経済は1国民の全体生活の部分であり、全

体的な国民史と関連させてはじめて歴史的に理解できるものである。国民経済の諸事実は歴史家によって、その構成にともに働いた物的・文化的要因の全体に帰せられなければならないということは当然のことであってなんの疑いの余地もありえない。」

「全体としてのそれらの全般的な理論的理解を独力であたえることのできるような理論はただ一つもない。こうした理解はむしろいつも精密的科学の全体が与えるにすぎない。」⁴¹⁾

経済は時間（歴史）と空間（物的・文化的要因）の中で全体論として展開されると説く。ここにメンガーのパーспекティブな方法論が現れている。木を見るだけではなく森を見る。もとより森を見ることによって木がより見えるというものである。人間科学としての経済学は経験的な全体論、「国民史と関連させはじめて」理解される、と言う。経済学は歴史に照らして社会的演繹が貫かれる。

メンガーと言えば、ドイツの新歴史学派の1人、シュモラー（Schmoller, G.v.）に抗して『経済学の方法』（『社会科学とくに経済学の方法に関する研究』）を上梓した訳であるが、彼は歴史を無視してはいない。国民史は全体論の中で経験を彩るものである。もとより、歴史から法則を抽出するのではなく、国民史は文化に視野を広げ全体論、社会的演繹を肉づける。それはまたリアリズムな立場である。メンガーとドイツ歴史学派との決定的決裂というのは正しくない。歴史という時間、社会という広い空間を射程に入れることを確認している。歴史と社会を精密的科学で見ていこうとしているのである。では、その精密的科学とはどのようなものか。

個人は経済を機能させている要素であるが、それは決して単独で機能するものではない。社会や国家の全体の中で機能しているのである。個人は揺るぎない核であるが、それは社会や国家あつての個人である。あくまでも全体論に付されねばならない。もとより、個人が全体の中で意見を失うことを意味しない。福祉を謳う全体をつくるのはあくまでも個人である。それは法則

や理論ではなく演繹に向けた論理があるのみである。したがって、為政者や学者の政策や立案には限界があるということである。換言すれば、社会科学は法則や理論があるのではなく、構築する論理があるのみである。メンガーは全体と個人を繋ぐ経済学をあらためて「精密的科学」とした。

では、結論的に個人と経済全体との間をどのように説明すればよいのであろうか。つまり「精密的科学」に含意される個人と経済全体との関係である。『経済学の方法』で言う。

『『国民経済』の現象はけっして国民そのものの直接的な生の発現、『経済する国民』の直接の結果ではなくて、国民のなかでの無数の個別経済的努力のすべての合成果であり、したがってまた、…擬制の観点からは理論的に理解され得ない。』⁴²⁾

つまり、個人の「無数の個別的 effort のすべての合成果」が経済である。そしてその個人は画一的な概念で擬制されてはならない。ケインズが『一般理論』で古典派経済学を「ロビンソン・クルーソーの経済」と言って、非難したことと軌を一にする⁴³⁾。しかしながら、メンガーの個と経済全体の考察はさらなる思考を巡らしたものである。メンガーは比喩を用いて説明を続ける。

「分かり易い比喩を使えば、（経済）は環から構成されている一つの全体であるくさりだが、しかし環自体は環ではない、（経済）は車輪から構成されている一つの全体であるメカニズムだが、しかし車輪自体は車輪ではない。」（修正訳、ルビ、かっこ内、筆者）⁴⁴⁾

つまり、環や車輪それ自体は環や車輪ではない。くさりの中で（全体論に結び付けられて）はじめて環であり、車輪である。環や車輪は全体であるくさり（経済機構）に収まっているが故に、つまり有機的に構成されたときに環や車輪である。いわば、メンガーの経済はヒュームの社会であり、カントの「第三の思考」と軌を一にする⁴⁵⁾。

われわれ人間は一人では生きられない。ヒュームが幾度となく展開してき

経済学とアナロジー（山崎）

たように、人間は社会による共同体によって恩恵を受け、一人であるよりは幸せにかつ健康に生きるすべを得ることができた。だとするならば、経済もそのような目標と目的が含意されてもっともなことである。スミスの「見えざる手」が語るように、経済には人知を越えた目標と目的が隠されている。だからこその他の生物を凌駕し、地上を支配してこられた。社会そして共同体そして経済はそうでなければ得られない益を人間にもたらしてきた。人間個人はメンガーが述べるように、「環であって環ではない」というのは経済というくさり全体に生まれなければ個人ではないということの意味している。したがって、経済という全体性は何かを産み出している。それは決して具体的ではないが、われわれ人間に福祉や生命の維持を与えてきた。体内のホルモンのように確かに機能している何かである。

社会、共同体そして経済は個人では得られない何かをわれわれに与えている。この共同体そして経済に具体的な果実としての目標や目的をおくことはできない。すなわち個人の利益は結果であって目的としておくことはできない。確かに経済に利益動機がなければ、共同体や経済に起源も発生も生じない。しかしその個人の利益動機は必ずや修正を余儀なくされる。その修正こそ社会や共同体が目的に向けられていることの証左である。こうして、メンガーの「人間の生命と福祉の維持」という一見利益からかけ離れた究極の目的が据えられる。ハイエクはこの究極目的に抽象的な「自生的秩序」を据えることとした。では、さらにメンガーの個人とはどのような経済人であったか見よう。

5 メンガーの個人主義は社会的演繹

ウィーン大学を出たシュンペーター（Schumpeter, J.A.）は個人と経済（全体）の間に「方法論的個人主義（methodologischer Individualismus）」をおいたが、これはメンガーの思想を汲むものではなかった⁴⁶⁾。既に述べてきたように、個（個人）と経済との間には乖離が存在する。個人の下にある価

値基準や意見は直接に経済すなわち「熟慮したわけではない結果」に結びつかない。それにも拘わらず、個人は諸個人として経済を作り上げている。メンガーの視点はあくまでも個人にある。メンガーとケインズとの相違は明らかである。メンガーの視点つまり経済学の基盤は個人、しかも消費者にある。これに対して、ケインズ経済学（『一般理論』）は消費者個人の視点が希薄であった（もとより、ケインズが個人をないがしろにしたというのではない）。有効需要として消費需要と投資需要が対等におかれた。消費需要は確かに個人であるが、投資需要は個人と言うよりも企業の意味である。これらを需要として対等におくことはウィーン学派（ミーゼスやハイエク）としては考えられまい。その個人を回復しようとするならば、個人主義と社会的演繹を展開しなければなるまい。

既述のように、個がもつ価値基準で経済全体を直接貫くことは所詮できない。個人の意向は市場に通じない。市場で成立する価格に個人は従わねばならない。それだけではない、経済取引には法規制が欠かせない。さらに経済社会は主観に満ちた「生命や福祉の維持」を求めねばならない。カントは福祉（幸福）は傾向性でしかなく、また道徳に対立するとし実現の困難さを説いた。⁴⁷⁾ 個人が希求するものは必ずや諸個人の中では緊張を呼ぶ。そのような難しさの中にあっても、社会科学は生命や福祉の維持を掲げ何等かの方向を見出さねばならない。

生命と福祉の維持で道徳と緊張をもつならば社会的演繹の中で解かれていかねばならない。メンガーはいち早くこの社会的演繹から経済学にこの課題を背負い果敢に挑んできた経済学者であった。そして、徹底して消費者個人に視点を置きこの課題に向かった。その実態的分析を見よう。

メンガーは『国民経済学原理』で言う。

「個々の財ではなく各種の財の総体が経済人の目的に役立つこと、しかもこの財の総体が、あるいは孤立経済における場合のように直接に、あるいは今日の発達した状態の場合のように、一部は直接に一部は間接

経済学とアナロジー（山崎）

に、個々の経済人によって支配され、それによって、ただこの総体性においてのみ需求（Bedarf）の充足と呼ばれる結果をもたらし、さらにこれに続いて人間の生命と福祉の維持という結果をもたらすこと、これらはいたるところでみてとれる。」（かっこ内と修正訳は筆者）⁴⁸⁾

財の需要は演繹や全体論に備えるべく財の需求とする。メンガーは個人が対応する個々の財やその需要を採り上げるのではなく、ある財の需要はその他の財全体との対応で考える。まさにメンガーの需求とはリアリズムに基づいたものである。そのリアリズムは財を需求するという人間の実態的かつ実存の姿に進む。したがって、財の需求は究極の「人間の生命と福祉の維持」に結びつけられる。いわば、経済学は「生命と福祉の維持」は演繹、全体論を要請する。⁴⁹⁾

メンガーは続ける。

「自分の欲望満足にたいする人々の配慮は将来の期間の財需求の充足に向けられた先慮（Vorsorge）となり、先慮が向けられる期間内の欲望や満足するに必要な財数量が、このようにして、その人の需求と名づけられる。」⁵⁰⁾

さらにリアリズムに現実を直視すれば、財の需要は他の諸々の財の総体を考慮するのみならず将来への需要を考慮せねばならない。需求とは需要の時間を考慮したものである。したがって、財の需求は複雑にして不確定な予定や予備を含意したものとなる。それが先慮である。こうして財の需要は哲学が扱ってきた現象学的な関係構造を視野に入れてあらためて需求と呼ばれる。財の需求はある期間（時間）と場（空間）を見据えた仮定を呼び込む。

こうして、メンガーの経済学は構築の経済学を呼び込む。これはヒュームやカントが持っていた構築の哲学で見て行かざるをえない。これを単純にイギリス古典派が掲げた予定調和の経済学と同一視はできない。需求は単に個人消費者の消費の猶予を意味しない。諸個人が掲げる社会的目標に従うべく

猶予を含意している。いわば、社会的演繹に基づく個人主義である。メンガーそしてミーゼス、ハイエクが正統的経済学に扱われずにきた理由である。

メンガーが掲げる経済学は当時としても異色のものであった。現代に至ってはなおさらのことである。それは単に短期に止まらず長期であるというのではなく、経済に社会的演繹の核を置くからである。換言すれば、リアリズムは蓋然性の低い社会科学を直視し、それを逆手にとって経済学を構築の科学に導いたのである。多くの経済学者が経済学を単なる経験科学と任じてきた方向に新たな改革を迫るものである。経済学は哲学を要請する。メンガーはこの社会科学の環境を理解していたと言えよう。

1963年経済学者・アロー（Arrow, K.J.）は「一般可能性定理」（「一般不可能性定理とも言う」）で、経済民主主義からは社会的厚生は編み出せないことを証明した⁵¹⁾。しかしこれまでの叙述から個人の意思は経済という全体に直接結びつかないことはメンガー経済学から明らかである。アローの「一般可能性定理」は政治学者まで議論が及んだが、政治学の分野においてもしごく当然な命題と扱われていた。おそらく、アローはオーストリア学派経済学を知らなかったのであろう。たしかに、ハイエクもノーベル経済学賞を得たのであるが、彼のオーストリア学派経済学を評価してのことではなかった。アローのノーベル経済学賞の受賞と相まって、経済学は分化した一自然科学の分野に成り下がっている感否めないのである。

また、イギリス・ケインジアンハロッド（Harrod, R.F.）は社会学（社会科学）はいまだ未発達科学としていた⁵²⁾。蓋然性の低さや多様性に終止符を打とうとすること自体社会科学の基盤を忘れた、むしろ非科学的と言わざるを得ない。社会科学は社会的演繹の科学、すなわち「不定の概念」でよいのである。

しかしながら、メンガーが経済学に掲げた意図は現代経済学から完全に放逐されてしまった感否めない。つまり、経済学に「人間の生命と福祉の維持」という目的を謳っても、理論的に不可能であると烙印を押されてきたに等しい。このことから、われわれは経済学や社会学が「人間の生命と福祉の

経済学とアナロジー（山崎）

維持」という目標や目的をもっても結局投げ出されるといふ憂き目に遭ってきた。その苦難に従わざるを得ないのであろうか。しかしそうではない。メンガーはそれを克服しようとした。

それは、経済学が自然科学と同様な立場に立ち、経験科学に凝り固まっているからである。換言すれば、経済学の向きを人間の科学へ変えないからである。経済学は財の背後にある人間に向けねばならない⁵³⁾。それには、演繹という手法を採ることであつた⁵⁴⁾。つまり、「人間の生命と福祉の維持」という目的に経済を向けることである。この方法は実証的分析に留まらずに規範的分析を要請する。当然後者には価値判断が要請される。これは厚生経済学が辿ってきた途でもある。いわば演繹はこの規範的分析を含意する。メンガーは『国民経済学原理』で述べている。

「価値は、財に付着するもの、財の属性でもなければ、独立してそれ自身存立する物でもない。価値は、自分の支配下にある財が自分の生命および福祉の維持にたいしてもつ意義に関して経済人が下す判断であり、したがって経済人の意識の外部には存在しない。その結果経済主体にとり価値をもつ財を『価値』と名づけたり、国民経済学者が『価値』をあたかも独立した実在物のように論じてこれを客観化するのとはまったく誤謬である。なぜなら客観的に存在するのはつねに物か物の数量にすぎず、物の価値は物とは本質的に異なつたもの、すなわち物の支配が自己の生命または福祉の維持にたいしてもつ意義に関し経済人の構成する判断であるからである。』⁵⁵⁾

経済は一期一会に満ちている。価値もまた一回限りである。価値はその環境下の瞬時の出来事の結果である。その環境を離ればその価値はあり得ない。客観化は不可能である。規則を求めても始まらない。

メンガーは限界効用の発見者の1人として著名であるが、それだけではなく、アナロジーが含意する社会的演繹を展開した人である。こうして蓋然性の低い経済学を逆手にとって経済学を構築の経済学とした。そこには諸個人

が構築する（未定の）経済に包括的目的に従う個人を描いて見せたのである。社会や国家もまた社会的演繹に基づく個人が機能するそれらである。

経済を包括的に言えば、次のようなことになる。経済は概念（究極の目的）に基づくが、それは「不定の概念」に基づく。またその経済は機械的法則に基づくが機械的法則によっては判定ができないものを含む。というように、経済はカントのアンチノミーで理解できる。これをハイエクは「自生的秩序」としてメンガーが掲げた「人間の生命と福祉の維持」よりもさらなる包括的概念によって克服しようとした。

6 ハイエクのアナロジー

ハイエクは周知のように、メンガーを高く評価してきた。当然のこと、オーストリア経済学の創始者・メンガーの思想を忠実に守ってきた一人であるからである。ハイエクは自らの思想の核心、「自生的秩序」はメンガーからの贈り物であることを述べている。それは、スミスを淵源とする言説、経済は「かれらが意図しない目的を常に促進している」を「そのスミスを超えて他のどんな著述家よりも明確にこの言い方の意味を説明したのはカール・メンガーである。」⁵⁶⁾と述べるところに現れている。さらにハイエクは注を付け、メンガーの『経済学の方法』から引用して説明を続ける。

「『ここに、われわれにとって注目すべき、恐らくもっとも注目すべき社会科学の問題が提起される。すなわち公共の福祉に役立ち、その発展のためにもっとも意義のある制度が、その創設を施行する共同意志なしにいかにして成立しうるか？』あいまいで、それでいて、すでに証明されているかのように用いられている『公共の福祉』という用語の代わりに『人間の意識的目的の達成にとって不可欠な条件に当たる諸制度』という言い方を仮にしてみたところで、このような『目的をもった全体』が

形成され、保持される仕方というのは、社会理論の特殊な問題なのであってそれはちょうど生物体の存在と維持が生物学の問題であるのと同じである、と言って過言ではない。』⁵⁷⁾

われわれは経済という機構において、意図しないがしかしある全体、ある目的に基づいて進展している。それは「人間の意識的目的の達成にとって不可欠な条件に当たる諸制度」に基づいている。一見矛盾のように見えるが矛盾ではない。カントはこれを「目的無き合目的」と形容した。われわれには共同の意志ではなく、共同の意見において制度を目的論的に進める能力が捉えられる、と。制度は限られた人によるそしてその人たちの設計ではない。ポパー（Popper, K.）が「批判的合理主義」⁵⁸⁾と述べてきたように、ハイエクもまた設計に基づかない合理主義に賛同する⁵⁹⁾。

共同の意志なき制度や経済（公共の福祉）と生物における存在と生命維持（ハイエクの父親が生物学者ということもあってか）とが類比されている、すなわちアナロジーである。プラトンの隠喩と同様、生物に着眼しその自然な仕組み、未知なる全体論、目的論に一致させている。

またハイエクは『複雑現象の理論』の冒頭で次のように述べる。

「人は驚きと必要によって科学的探求へと駆り立てられてきた。このうち圧倒的に多くを産み出してきたのは驚きの方であった。それには正当な理由がある。われわれは驚く場合、すでに尋ねる問いをもっている。…疑問は、われわれがその出来事に関する何らかの暫定的な仮説または理論を形成していることを前提にするのである。」

「疑問は、われわれの感覚が出来事に繰り返し現れる何らかのパターンまたは秩序を認めた後にのみ、はじめて生まれるだろう。ある類似の特徴をもつある規則性（または繰り返し現れるパターンまたは秩序）を他の点では異なる状況において再認知すること [re-cognition]、それこそがわれわれを驚かせ『なぜ?』と問わせる。われわれは、そのような相違の中の規則性に気づくとき、同じ作用因の存在を疑い、それを探すことに

興味をもつようになる。このようにわれわれの精神は造られている。われわれの達成した環境に関する理解と支配は、その内容がどんなものであれ、われわれの精神のこの特徴に負っているのである。」⁶⁰⁾

科学的態度はまず驚きをもって始まり、そして即問いをもつ。その驚きをもって科学が開始されるとは、スミスの叙述からのものである。スミスは言う。その驚き (wonder, surprise) が科学 (哲学) の第一原理である、と。その驚きに必ず伴うものは類似性 (resemblances) である、と⁶¹⁾。ハイエクはその言説を受けて更なる説明を施す。

その問い (疑問) にはパタンや秩序すなわち何らかの仮説もしくは理論を伴っている。そしてその一連の思惟形式の流れはアプリアリであるという。これらパタンや秩序そして仮説や理論は事前に何らかの似た同様のものを持ち合わせていなければならない。ケインズが『蓋然性論』で述べていた (既述の) 「命題に関してわれわれがもつ知識はわれわれが置かれている状況による。…したがってその命題と関係させる知識をわれわれが指定しないかぎり、その命題を確からしいと呼んでも意義はないのである。」に通じる。そして新たな対象にその先行したパタンや秩序そして仮説や理論が似た形で訪れることを期待しているのである。これは科学者に限らずすべての人にアナロジーという類比、推論機構が働いていることを意味している。

ハイエクはこのアナロジーをわれわれが認識、道徳そして判断に現れるパタンに移行して議論を進める。パタンとは既に何等かの概念を既に経験的にもっているから現れるのである。そして次の当面する経験にそのパタン認識 (道徳そして判断) を適用していくのである。過去に培われたパタンの下で新たな対象に適用する。それはアナロジーという方法がワークしているのである。認識、道徳そして判断はすべてその下でなされる。決して帰納法や演繹法がワークしているわけではない。ハイエクはこの言説を心理学に及んで『感覚秩序』と纏めたことは周知の通りである。抽象はアナロジーの川に架かる橋の役割を果たしている。そしてその抽象は自然に脳に発生する。した

経済学とアナロジー（山崎）

がって脳が形成する認識，道徳そして判断はパターンや概念構成という意味で秩序以外の何ものでもないことを理論的に証明する。

ハイエクはメンガーから得た「意図しない目的を常に促進している」経済を制度化として法に委ねることとなる。それが『法と立法と自由』に体现される。メンガーが「人間の生命と福祉の維持」という経済学の目的性を「自生的秩序」の中に包括させたことは、生物がもつ自生的成長をアナロジーとしたからにはかならない。考えてみれば、カントのアプリオリな哲学もその起源は法が抱えていたアプリオリな実態にあった。ハイエクはそのアプリオリな実態を感覚に見出した。それが抽象であり、アナロジーをさらに進展させたと言えよう。

ハイエクの抽象は古代哲学者・アリストテレスのアナロギア（類比）を援用している。ハイエクは著述『科学による反革命』と『個人主義と経済秩序』の二回にわたって展開している。ハイエクは述べている。

「社会科学に関連した人間活動の対象およびこの人間活動そのものにかんして重要とおもわれる点は、人間活動を解釈する場合、物理的性質を少しも共有しない非常に多くの物理的事実のいずれか一つを同一の対象または同一の行動の事実として、われわれが自ずから、無意識のうちに一緒に分類しているということである。われわれは自分と同じく他の人々もまた非常に多くの物理的に異なった事物、a, b, c, d, …等々のいずれか一つを同一のあつまりに属するものと見なしていることを知っている。そしてその理由は、同様にどんな物理的性質をも共有しないような運動、 α , β , γ , δ , …のいずれか一つを通じて、これらの事物のどれか一つに対し、他の人びとが自分と同じように反応するからだということを知っている。しかもわれわれが行為する場合、常にこうした知識に依拠しており、この知識は、他の人たちとのどんな交わりにも必ず先行し、また予め想定されてもいる。したがってそれは、〔同一の〕集まりの構成要素としてためらいなく認知される。あらゆるさまざまな物理

現象をことごとく数え上げる立場に立つという意味での意識された知識ではないのである。」⁶²⁾

この箇所はアリストテレスが述べたアナロギア（*αναλογία*）からのものである。アリストテレスの『形而上学』に次のようにある。「『存在』というのにも多くの意味がある。〔訳しかえれば、物事はいろいろの意味で『ある』と言われる〕。しかしそれらは、或る一つのもの、或る一つの自然〔實在〕との関係において『ある』とか『存在する』とか言われるのであって、同語異義的にではなく、あたかも『健康的』と言われる多くの物事がすべて一つの『健康』との関係においてそう言われるようにである…。」⁶³⁾ これはカントのアナロギア（*Analogie*）⁶⁴⁾の説明に通じるものである。

ハイエクの自生的秩序はアナロジーによって支えられていると言えよう。自生的秩序はメンガーが掲げた「人間の生命と福祉の維持」よりも一般性と包括性をもっているが、古代哲学がもっていた存在論に近いものである。ハイエクはアナロジーの方法論が脳の機能に存在することを見出す。その機能はパタンであり、かつ抽象である。脳が描き出す概念、道徳そして判断すべてがパタンと抽象によることになる。もとより、それは唯名論に基づくものであり、諸個人が育むものである。ハイエクの盟友・ポパーの「世界」に等しい。⁶⁵⁾ 脳は個人の脳でありつつも、諸個人の脳に淵源する。ハイエクによってアナロジーにさらなる分析が施されたことになる。

7 アナロジーという方法の意義

既述のように、アナロジーは必然性や確実性から離れた蓋然性であった。しかし、こと社会科学で大いに意義を持ちうるものである。なぜなら、所詮社会科学は蓋然性の低いものであるからである。そしてアナロジーは全体論（社会的演繹）を生起させずにはおかない。換言すれば、西洋哲学は人間が社会や共同体（そして経済機構を含む）から得られる恩恵に気づいてきたから

経済学とアナロジー（山崎）

である。それだけにアナロジーの意義は強まるも弱まるものではない。西洋哲学が延々とアナロジーの意義を継承してきたのも頷けるというものである。

この言説を哲学的に見てみよう。既述のようにアナロジーは古代哲学まで遡ることができる。プラトンの立てた洞窟の隠喩がアナロジーとして今日でも生きている。すなわち「善のアイデア」：「他の諸々の認識対象」＝「太陽」：「すべての生き物」⁶⁶⁾ というアナロギア（類比）に遡る。われわれ人間は社会や共同体から得られる恩恵にこよなく依存している。ならば、社会や共同体そして経済は善のアイデアとすることができる。その下で他の諸々の認識対象が存在する。その関係は太陽とその下で生きるすべての生き物に類比できるし、類推が進む。すなわち「他の諸々の認識対象」が「すべての生き物」に置き換えられ、秩序が保たれている。現に「すべての生き物」はそれぞれの新陳代謝に従って、共存共栄が計られている。

このような言説を述べると、多くの科学者そして経済学者は曖昧なおとぎ話に誘われた感を持つに違いない。しかし既述のように、アナロジーは帰納法や演繹法からもたらされる必然性や確実性を得るものではない。社会科学はそれでよいのである。なぜなら、社会科学が求める目的や目標にそのような必然性や確実性を描き出すことができるのかというと、決してできないし求めることもできない。社会科学において人間はことのほか有限におかれている。それでよいのである。アナロジーは蓋然性を獲得するのに大いに役に立ってきた。

近世哲学が哲学の峯に登り詰めたことは誰もが認めるところである。その峰にヒュームとカントを挙げることができる。その理由は、彼らが人間共同体が持つ希望を確認したからである。ヒュームは懐疑主義に陥りながらも人間共同体にその懐疑性を克服することを見出したからである。それを支えるのには人間社会の共感が必要であった。したがって、経験的に社会機構に演繹を見ていた。これに対して、カントはアプリアリな部分を法の世界に見出した。つまり彼の超越論的哲学は法に淵源する。法の世界（相続権）に演繹を見ていた。つまり法の一般性を社会の事実として見ていた。彼らはともに

社会的演繹（全体論）に哲学の契機を求めたと言えよう⁶⁷⁾。

考えてみれば、これらはともにプラトンの洞窟の隠喩（類比）に基礎をもつと言える。これらはアナロジーが持つ全体論であり、（形式論理学とは異なる）社会的演繹に基づく道徳や判断そして秩序を獲得しうるからである。社会科学にアナロジーは不可欠である。

ニュートン（Newton, I.）の話をしておこう。ニュートンは万有引力の法則で有名である。今にして言うならば、理論物理学者もしくは宇宙物理学者（天文学者）である。ドイツ人・ケプラー（Kepler, J.）が天体の秩序（惑星の軌道）を発見し、その下で万有引力の法則を発見した。そのニュートンがイングランド銀行の初代総裁であった。自然科学が発達した今日経済学の分野である貨幣管理の畑違いに、なぜ理論物理学者が就任したのであろう。それにはアナロジーが生きている。これは筆者の推測の域を出ないが、本人が就任を促した人かそして両者にか、アナロジーの意識に基づいていたのではないか。それは天体の軌道と貨幣の発行はともに秩序に基づかねばならないからである。神学にも通じていたニュートンのこと、やはりプラトンの隠喩に通じていたのではないか。

論を戻そう。ではメンガーの「生命と福祉の維持」やハイエクの「自生的秩序」はアナロジーとしてどのように考えればよいのであろうか。プラトンの隠喩に合わせて考えてみよう。プラトンの立てたアナロギア、「太陽」：「すべての生き物」＝「善のイデア」：「他の諸々の認識対象」の後半にメンガー、ケインズ、ハイエクにそれぞれの命題を入れてみる。それぞれをアナロジー（類比）、社会的演繹で比較してみる。

メンガー	善のイデア	：	他の諸々の認識対象	=	生命と福祉の維持	：	諸個人
ケインズ	々	：	々	=	完全雇用	：	諸々の需要喚起手段
ハイエク	々	：	々	=	自生的秩序	：	諸個人の意見

こうしてみると次のことが言えよう。カントはこの判断において既述のアンチノミーを掲げ、「反省的判断力」を解決手段とした。しかしながら、メ

経済学とアナロジー（山崎）

ンガーが掲げた福祉は道徳との緊張をもたらし困難を極める。ケインズの掲げた完全雇用は正義に満ちたものであるが総供給関数や総需要関数から決まるものではない。つまり両者とも（いわゆる）ミクロ的視点に立つ個人消費者から全体論は不可能という、命題と衝突する。そうすると、ケインズが語る『蓋然性論』ははたして『一般理論』にどれほど生かされているのであろうか、疑問を持たざるを得ない。またメンガーが原理の第二版の出版を予期しながらできなかったのは「人間の生命と福祉の維持」が抱えるアンチノミーを克服できなかったからであろうことは想像に難くない。

意見を掲げた、ハイエクのみが有効となろう。「自生的秩序」には秩序に向け自らの制御を含意しているからである。カントが述べたように、「哲学は理性の職人ではなく、人間理性の立法者で」社会科学の主体個人もまた理性を制御しなければならないのである⁶⁸⁾。換言すれば、アナロジーは神人同形同性論（anthropomorphism）⁶⁹⁾に陥ってはならないということであり、非人称の世界、すなわち「第三の思考」を堅持しなければならない。最後にそれに必要な議論を試みよう。

8 結語

ハイエクの全体論、「自生的秩序」をカントが展開する判断力に照らして分析を施してみよう。判断力（Urteilkraft）とは特殊的なものを普遍的なものの下に包摂する能力である⁷⁰⁾。「自生的秩序」はこの「普遍的なもの」と言えよう。それに対して、個人は「特殊なもの」と言えよう。個人はまさに「自生的秩序」の下に包摂される。その意味で、判断力は「自生的秩序」を可能にする思惟能力と言えよう。

また、判断力は規定的判断力と反省的判断力に分けられる。前者は普遍的なものが与えられている場合、特殊なものをその下に包摂する能力であり、後者は特殊なもののみが与えられている場合、そこから普遍的なものを見出す能力である⁷¹⁾。前者は諸個人が意見によって進む全体論の領域であ

り、経済では市場（もっともハイエクはカタラクシーと言うが）を含意する。後者は個々人に反省が要請されることを考えれば理解される。もとより、前者は後者を伴うが故に可能であり、後者もまた前者があるが故に機能する。規定的判断力と反省的判断力、二つが相まって「自生的秩序」が実現を見る。まさに判断力は全体論である。

そうであるがゆえに、判断力はアンチノミーを引き起こす。アンチノミーとは理性の対立である。人間が「理性の立法者」ならば自らが理性の法廷を持つ。その法廷で立てられたテーゼとアンチテーゼのどちらが正しいのかということである。カントはアンチノミーを「美学的判断力」と「目的論的判断力」とに分けて説明を施す。

「美学的判断力」は「趣味判断力」を意味する。趣味（Geschmack 人の好み）はまさに個人的なもの、つまり主観的であるものの満足を含意するが故にあらゆる人に通じ、普遍妥当性をも持ち合わせるに違いない。いわば、趣味は個と全体とを取り持つ具体的例である。

このような中で、趣味判断の普遍妥当性にアンチノミーが生じる。テーゼは概念に基づかない、に対して、アンチテーゼは概念に基づく。解決は「不定の概念」に基づくとされる。「自生的秩序」はまさにこの二つの命題を堅持し、「不定の概念」と位置付けられてきた。

また「目的論的判断力」は反省的判断力を主眼とする。つまり、単に特殊的なものを普遍的なものに包摂するという規定的判断力ではなく、特殊なものから普遍的なものを見つけ出す能力である。「目的論的判断力」は反省的判断力を不可欠とする。そうであるが故に、「目的論的判断力」は客観的であるはずはなく、あくまでも蓋然性をもつに過ぎない。したがって、自律をさらに自己自律（Heatonomie⁷²⁾として自らに反省を加える反省的判断力が要請される。この自己自律は自律と他律という二元論を超える世界である。自己自律は「自生的秩序」に含意された自生に当たる。

ここでまたアンチノミーが生じる。テーゼは物質的なものの産出はすべて機械的法則に従うというものである。それに対して、アンチテーゼは物質的

なものの産出は機械的法則によっては判定できないものがある、というものである。「目的論的判断力」の思惟は経済機構の実態に説明を施したものと見えよう。例えば、価格はコストに見合っただけで決められる。だがその法則に従うというよりも市場価格に従わねばならない。コストからきた価格と市場価格は対立の構図、ここでいうアンチノミーに陥る。したがって、市場価格に見合わない財は商品として成立しない。そこには常に「反省的判断力」が機能する。ここに秩序が成立する。「目的論的判断力」は「自生的秩序」に説明を施したものと見えよう。この抽象的な説明に「自生的秩序」を当てはめてみれば包括的にそして具体的に「目的論的判断力」が理解される。

こうしてみると、「判断力」は二つの分野を担っている。一つは理論（存在や認識）と実践（当為や道徳）どちらにも純粋に属さない分野をもつ。換言すれば、どちらの分野にも属する。もう一つは合理論と経験論とを総合する分野をもつ。換言すれば、この基盤は「自生的秩序」を実現する立場と共有される。いわば、全体論すなわちアナロジー（類推）が抱える世界を提供する。

ハイエクがこのように説明しているのではない。しかしハイエクは自らの哲学はカントに依存していたことをあらためて明かした⁷³⁾。そのことを考えると、経済学を広い分野を取り入れた社会科学的視点から思考する包括的指針「自生的秩序」はカント哲学とくに第三批判（『判断力批判』）無くして、説明はあり得ないように見える。

これもまたハイエクが言及しているわけではないが、筆者にしてみると趣味（好み）は財に流れる概念と言って過言ではない。だが趣味の普遍妥当性が高まったものが財を維持しうるかと言えばそうではない。一時的流行に終わることが多い。しかし普遍妥当性をもたないものは売れない財となる。趣味も財も蓋然性の中にある。価格はその蓋然性を左右する。既述のように、メンガーが言う、財の価値は「財の属性でもなければ、独立してそれ自身存立する物でもない…生命や福祉の維持にたいしてもつ意義に関して経済人の構成する判断である」は判断力の世界である。メンガーの財は単なる経済財を超えて「生命や福祉の維持」に結集する。

経済学は人間個人と社会との関係が財を通じて顕わになる科学である。財は表面に出た、すなわち社会に顕在する靱帯と言えよう。正統学派が気づいたように、財は人間にとって最も個性的な対象にして最も一般的な対象である。その背後に一時も見失ってはならない人間がいる。その演繹の姿をハイエクは次のように述べていた。

「経済学はその推論に内在するものの力によって、すべての社会科学の中心的問題に対する解答に、他のどの社会科学よりも近づいていることを、私は今でも信じている。この中心的問題というのは、様々な人々の考え方の中に存在する知識の断片を組み合わせたものが、もしその結果を意図的に実現しようとするのであれば、指令を発する人の側に実はいかなる個人も持つことができないような知識（knowledge）を必要とするものである。」（かっこ内は筆者）⁷⁴⁾

経済は「意図せざる結果」をわれわれに経験させている。それは指令無しの結果であり、メンガーは「無反省的な結果」と言った。その「無反省的な結果」に概念的であるが（つまり具体性はないが）、確かな目的や目標を与えたのがオーストリア学派経済学であつた。メンガーの「生命と福祉の維持」はハイエクに「自生的秩序」を与えた。ハイエクはアナロジーを支える広範な概念で衣替えをしてきた。

既述のように「生命や福祉の維持」や「自生的秩序」は理念やモデルのように固まった概念を含意するものではない。経済に自然な演繹（「無反省的な結果」）が宿るならば、敢えてその包括性をもって進もうというのである。その包括性は全体論であり発見的原理である。そのために「いかなる個人も持つことのできない知識」が生起する。その知識（knowledge）とは、演繹であるがゆえに生起する。それは全体論であるがゆえにアナロジーに依存する。

経済学の流れを見ると、功利主義に食らいつき専門化の一途を辿ってしまった。それは経済学の自然科学化、因果律のみを追う世界であつた。その対極にアナロジーの世界があつた。アナロジーは社会的演繹の世界である。そ

の全体論の世界は個人では想像もつかない知識と知恵を編み出す可能性を秘めている。しかしながら、現代はそれに気づかない経済学者で占められていることが危惧される。

註

- 1) KrV, S. B703. (石川文康訳『純粹理性批判（下）』筑摩書房, 2014年, 347頁)
- 2) 社会的演繹は形式論理学の掲げる演繹とは異なって、合目的な課題を掲げそれを市民社会で合意することを指している。近世の哲学者、ヒュームやカントが立っている基盤である。
- 3) 金井良太著『脳に刻まれたモラルの起源』岩波書店, 2013年
- 4) SO, p. 32, 1. 96, p. 109, 5. 25 (穠山貞登訳『感覚秩序』春秋社, 1989年, 41-42頁, 128頁)
- 5) Hume, D. *Enquiries concerning Human Understanding and concerning the Principles of Morals*, ed. by L. A. Selby-Bigge, Clarendon Press Oxford, 1998. p. 104. (渡部峻明訳『人間知性の研究・情念論』哲書房, 1990年, 145頁)
- 6) Hume, D., *Ibid.*, p. 72. (『人間知性の研究・情念論』102頁)
- 7) Hume, D., *Ibid.*, p. 30. (『人間知性の研究・情念論』47-48頁)
- 8) ヒュームは述べている。「…経験と観察と類比とが、…推理に当たって、我々が理性的に従いうる唯一の案内人であるとすれば、結果と原因の両者は共に、我々が知っている、また我々が多くの事例において相互に連結しているのを見いだした、他の諸結果および諸原因に相似な点や類似点をもたねばならない。」Hume, D., *Ibid.*, p. 148. (『人間知性の研究・情念論』211頁)
- 9) ケインズは述べている。「どんな特殊な諸命題をわれわれの推論の前提として選ぶかは、当然のことながら、われわれ自身の独自の主観的諸要因によって決まるが、しかしそれら前提とされた諸命題と他の諸命題との間に成り立つ関係、つまり確からしい信念をもつ権利をわれわれに与えるその関係は、客観的であり、そして論理的である。」*The Collected Writings of J.M. Keynes, Vol. VIII (A Treatise on Probability)*, The Royal Economic Society, 1973, p. 4. (佐藤隆三訳『ケインズ全集第8巻 確率論』東洋経済新報社, 2010年, 4-5頁)最後の部分はカントのアプリオリを彷彿とさせる。
- 10) ひところの高度成長を経験した国家はケインズ経済学に科学性を見いだしたのである。バブル経済の崩壊やリーマンショックを経験した現代はこの科学性が嘘のようなものである。イギリスのエリザベス女王は処方箋が無い経済学者を批判することとなった。
- 11) メンガーの後継者である、ミーゼスやハイエクも哲学の隣で経済学を論じていた。同様に、ケインズは伝統的なイギリス経験論の影響下にあった。その経験論は帰納法に中心をおいていた。したがって、ヒュームやケインズに社会的演繹という表現は現れない。しかし、演繹が社会的に施されている。それ故、演繹に社会的を加え

た「社会的演繹」とした。

- 12) もとより、法学や社会学においても演繹や全体論が意識されないということではない。後に述べるように、あらゆる社会科学に演繹や全体論は意識されねばならない。ただ経済学は商品ひとつとっても多くの生産者の関わりを具体的に発見することができる、社会科学と言えよう。
- 13) ある種の演繹（全体論）とは、ケインズが経済の目的に秩序や福祉を採用せず、短期理論に徹して完全雇用を掲げたからである。
- 14) Dostaler, G. *Keynes and his Battles*, (An augmented and revised edition of *Keynes et ses Combats* Paris, Albin Michel, 2005, translated by Niall B. Mann) Edward Elgar Publishing Limited, 2007. p. 256. (鍋島直樹・小峯敦監訳『ケインズの闘い』藤原書店, 2008年, 560-561頁) ドスターレールは述べている。「ケインズの経済理論は社会の総体的な理解の一部であり、社会に関するそのような理解こそが、ケインズの最大の独創性の源泉となっている。…ケインズの『世界観』は倫理的・認識論的な基礎に立脚しており、この基礎ゆえにケインズは、自立的と見なされてきた経済学という学問の科学性に疑問を投げかけることとなった。」
- 15) *The Collected Writings of J.M. Keynes, Vol VII (The General Theory)*, The Macmillan Press Ltd, 1936), The Royal Economic Society 1973, pp. xxxii-xxxiii.. (塩野谷祐一訳『ケインズ全集 第7巻 一般理論』東洋経済新報社, 1983年, xxxvi-xxxvii頁)
- 16) *UMS*, S. 153. S. 182 (福田考治・吉田昇三訳 吉田昇三改訳『経済学の方法』日本評論社, 1986年, 142頁, 167頁)。
- 17) *CRS*, p. 41. (佐藤茂行訳『科学による反革命—理性の乱用—』木鐸社, 1986年, 22頁)
- 18) 第一効用は序数であって基数ではない。つまり効用は計測不可能である。価値理論から経済全体の価値額を見ることはできない。
- 19) 筆者の言うケインズ革命はクラウアー (Clower, R.W.) やレイヨンフーブヴド (Leijonhuvud, A.B.) に従っていて、ケインズ理論（『一般理論』）をIS-LMで示されたようなワルラス一般均衡との調和、いわゆる新古典派的総合とは理解していない。
- 20) 今更述べるまでもなく、貯蓄は個人の美德であるが、経済全体では（とりわけ経済が沈滞したときは）悪徳である。
- 21) *The Collected Writings of J.M. Keynes, Vol. X, (Essays in Biography)*, The Royal Economic Society, 1972, pp. 436-437. (大野忠男訳『ケインズ全集 第10巻 人物評伝』東洋経済新報社, 1980年, 569-571頁) ケインズは述べている。「有機的統一の原理に従って、全体としての事物の状態によって決定され、分析的に部分に分解しても無益であった。」「私自身は、常に一貫して有機的統一の原理の主張者であった。」この主張を支えたのは哲学者・ムーアであった。

ムーアは述べている。「身体の諸部分は『有機的統一の原理』を成すとか、それらは相互に手段であるとともに目的でもあるということによって意味されている…。そして、ここにはたしかに生物の顕著な特徴がある。しかし、この因果的相互依存という関係が生物によってのみ示されており、したがって生物の特殊性を定義するに足る、と主張することはきわめて性急であろう。そして、この相互依存の関

係を持つ二つのもののうち、いずれもが内在的価値を持たなかったり、一方がそれを持ち他方がそれを欠いていたりすることがあるのは明らかである。それらは、『目的』が『結果』を意味する場合は別として、それ以外の意味ではかならずしも相互に『目的』であるとはかぎらない。そしてさらに、結果という意味では、全体はそのいかなる部分に対しても目的ではありえない、ということは明らかである。われわれはその部分のひとつと対比して『全体』というものを語りがちであるが、その全体の意味するのは、実際にはその残りの諸部分にすぎない。しかし厳密には、全体はそのすべての部分を含まなければならない、どんな部分もそれ自身の原因ではありえないゆえに全体の原因ではありえない。それゆえ、明らかにこの因果的相互依存という関係は、その関係が持つ対象のうちいずれの対象の価値についても、何ごとをも含意しないし、たとえその対象が二つながらたまま価値を持つことがあるとしても、それらの間のこの関係は、部分と全体との間には成り立ちえない関係である。」なお、ケインズもまた全体論において経済学を立ち上げていたことについては既に論じてきたところである。拙著『ケインズとハイエク（1）』（『政経論叢第147号』）、27-28頁を見よ。Moore, G. E., *Principia Ethica*, 1903, Cambridge University Press, 1903, p. 32.（深谷昭三訳『G・E・ムーア倫理学原理』三和書房、1982年、41頁）

- 22) 個物主義は中世のスコラ哲学を賑わした普遍論争を呼び込まずにはおかない。つまり、個（個物もしくは特殊）は普遍とは対極にある。そこでこの世界に普遍は存在するかどうかという問題である。それに対して存在するというのが実念論（実在論）であり、普遍は名目に過ぎないというのが唯名論である。スコラ哲学は実念論（自然的理性論）にあった。しかしながら、そもそも普遍は此岸の世界にはなく彼岸の世界である。両説の中間に概念論がある。この点でイギリスのスコラ哲学者・オッカム（Occam, W. 1280-1347）が唱えた唯名論の貢献は大きい。もとより、オッカムはスコラ哲学（合理的神学、この世の事象を普遍である神による演繹で理解する）の批判者である。彼はカトリックとは普遍を意味し、此岸に彼岸を得ているかの如きスコラ哲学を滅亡させた。と共に、イギリス経験論（感覚論的認識論）への貢献が挙げられる。キリスト教神学と理性の二元論が確認され、プロテスタントの信仰を編み出す礎となった。換言すれば、アウグスティヌスやデカルトと同様に人間個物の知識を重んじかつ共通性（社会科学での共感）で補う個物主義に普遍性を求める志向が築かれた。その意味でヒュームもカントも唯名論と経験的実在論を採る。カントは「汎通的基底」として個物を支持する（『純粹理性批判』B. 601）。社会科学ではこれをもとに個物主義は個人主義となった。それは永遠に続く概念論である。
- 23) *The Collected Writings of J.M. Keynes, Vol. VIII (A Treatise on Probability)*, p. xxv.（『確率論』xxvii頁）
- 24) これまで *A Treatise on Probability* はおおかた『確率論』と訳されてきた。筆者もそれに従ってきた。しかしこの著作を読み進めたところ『蓋然性論』と訳する方がより字義に適っていると思われるようになった。確率論と訳せばどうしても数学的

確率が強くなるからである。A *Treatise on Probability* はあくまでもイギリス経験論で実証性を科学とする風土から言えば『確率論』でよいとの意見もあろう。しかしながら、ケインズの probability はこの経験論を超えようとしている。訳語の「確率論」や「確率」は訳者に従ったが、説明の段階でその都度「確率」にあとに「蓋然性」として同一であることを示した。

- 25) *The Collected Writings of J.M. Keynes, Vol. VIII, p. 4, p. 241.* (『確率論』, 4頁, 251頁) を見よ。
- 26) 今となつては、ケインズが美学に及んでいたことは多くのケインズ研究者が認めるところである。Dostaler, G. *Ibid.*, pp. 234-234. (同書, 511-516頁)
- 27) *The Collected Writings of J.M. Keynes, Vol. VIII, p. 241.* (『確率論』, 251頁)
- 28) *The Collected Writings of J.M. Keynes, Vol. VIII, pp. 245-247.* (『確率論』, 255-256頁)
- 29) ハイエクは述べている。「社会研究は事物の間の関係ではなく人と事物の関係または人と人との関係を取り扱う。社会研究は人間の行為に関心をもち、その目的は多くの人びとの志向せざる、または意図せざる結果を説明するところにある。」*CR*, p. 41. (『科学による反革命—理性の乱用—』22頁)
- 30) ヒュームは述べている。「われわれは人為的な徳について首尾よく諸実験（主張を裏付ける経験的観察）を手に入れた。そこでは、諸性質を持つ、社会にとっての善に向かう傾向が、われわれの称賛の唯一の原因であり、他の原理がともに働いている疑いはない。このことから、われわれはその原理の強さを学ぶ（知る）。こうしてその原理が働くと考えられ、称賛される性質が実際に社会にとって有益である場合、真の哲学者は、どんな強い称賛や敬意を説明するのに、いかなる他の原理をもけっして必要としないであろう。」「…、どの点からみても社会に利益をもたらすのに適している場合、想像力は、原因を完全なものとするためにまだ欠けているいくつかの事情があることを考慮せずに、原因から結果へと容易に移行する。一般規則が一種の蓋然性を作り出す、それは時には判断力に影響し、想像力には、常に影響するのである。」*THN*, p. 578, p. 585. (伊勢俊彦・石川徹・中釜浩一訳『人間本性論第3巻』法政大学出版局, 2012年, 139頁, 146頁)
- 31) 第三の思考はアンチノミーに見られる。アンチノミーは3批判すべてに展開されている。ここではアンチノミーが発見の論理であることを述べておく。アンチノミーの「前提から引き出される命題の抗争は、前提に過ちがあることを発見し、そのことをとおして、感覚の対象としての物の真の状態を発見することへと、われわれを導いたのである。それゆえ、超越論的弁証論はけっして懐疑論を支持するものではないが、懐疑的方法を支持する。人が理性の論証を互いに最大限に自由に展開させれば、懐疑的方法は超越論的弁証論において、その大いなる効用の一例を示すことができる。」*KrV*, S. B535. (石川文康訳『純粹理性批判(下)』筑摩書房, 2014年, 208頁)
- 32) 『経済学の方法』の訳者・吉田昇三は Analogie を類比と訳したり、類似と訳している。これは適切ではない。*UMS*, S. 142f. (『経済学の方法』134頁)
- 33) メンガーのアナロジー（類比）は確かな説明で経済に結びつけられて議論されている。

経済学とアナロジー（山崎）

るとは言い難い。メンガーは自然有機体と社会現象の間における類比に限定している。当時のウィーン大学の環境から言って、自然科学の興隆の中マッハ（Mach, E.）が自然科学と哲学を区別しなかったことが社会科学に影響を及ぼしていたと理解される。しかしながら、自然科学の領域である生理学や解剖学と政治経済学とを類比として一緒にすることはできないと自ら戒めている。メンガーは経済現象が「熟慮されない結果」であることに信念を持っていた。UMS, S. 151. (『経済学の方法』139-140頁)

- 34) UMS, S. 142f. (『経済学の方法』134頁)
- 35) UMS, S. 148. (『経済学の方法』138頁)
- 36) UMS, S. 149. (『経済学の方法』139頁)
- 37) メンガーは言う。「個々の財ではなく各種の財の総体が経済人の目的に役立つこと、…この総体性においてのみ需求の充足と呼ばれる結果をもたらし、さらにこれに続いて人間の生命と福祉の確保という結果をもたらすこと、これらはいたるところでみてとれる。」「人々がその生命と福祉を維持するための配慮は、…人々の需求の充足にたいする配慮となる。」しかしながら、この説明では需求と全体論の「生命と福祉の維持」との関係がなされずじまいである。「意図されない結果」に答えていない。GV, S. 31. S. 32. (安井琢磨・八木紀一郎訳『国民経済学原理』日本評論社, 28頁, 29頁)
- 38) メンガーはこの「人間の生命と福祉の維持」を国家的立場で展開しようとしたのではなく、社会的立場で展開しようとしたとの玉野井芳郎の指摘が思い起こされる。その証左として、メンガーは原理の第2版を上梓する意志はまだ熟していなかったものの、そのタイトルのメモ書きにVOLKS（国民）の部分が消してものを発見したと、と玉野井は言う。それに従って、訳者（八木紀一郎・中村友太郎・中島芳郎）は息子メンガー（Menger, K.）が出版した第2版を『国民経済学原理』とせず『一般理論経済学』（みすず書房、1982年）と訳した。後者の同書vi頁を見よ。
- 39) GV, S. 76. (『国民経済学原理』66頁)
- 40) 同時代のワルラスと比較しておこう。ワルラスは均衡に至る過程に一筋縄ではいかない模索過程（タトヌマン *tâtonnement*）があることを示唆している。しかしこれはあくまでも需要と供給の均衡を前提した価格調整過程である。したがって、この模索過程は現実から離れたものであった。仮定をおくことは限界効用という個人の心境をリアリズムに描くことができないことを意味している。しかし近代経済学に属する多くの経済学者がこの仮定やモデルの道を歩んできた。理論はまさに仮定の下にあり、現実の下にはない。
- 41) UMS, S. 63f. (『経済学の方法』, 68-69頁)
- 42) UMS, S. 87. (『経済学の方法』, 89頁)
- 43) *The Collected Writings of J.M. Keynes, vol. VII (The General Theory)*, p. 380. (間宮陽介訳『一般理論（下）』岩波文庫、2008年、189-190頁）「この多様性というものは、いまにいたる諸世代の最も成功した選択を体系化した伝統を保持し、それが織りなす多様な空想で現在に彩りを添え、しかもそれは伝統や空想の侍女であると

ともに実験の侍女でもあり、将来をより良きものにするための最強の道具なのだ。」ケインズも個人主義を支持して、その多様性を経済学の基底においていた。その意味でケインズもメンガーに通じる個人主義の持ち主であった。

- 44) *UMS*, S. 233. (『経済学の方法』, 214 頁)
- 45) *UMS*, S. 234. (『経済学の方法』, 215 頁)
- 46) 『経済学の方法』の訳者・吉田昇三は同書の最後の「解説」の「Ⅱ『経済学の方法』読者案内」(386 頁)でシュンペーターの「方法論的個人主義」は適切ではないと述べている。筆者もこれに同意する。そもそもシュンペーター（ウィーン大学の卒業であるが）にメンガーの思想はくみ取られていない。シュンペーターは言う。「方法論的個人主義は哲学的性質の思弁、未来の理想、その他これに類するものでは決してない。」いわば、経済全体と個人の間には存在する課題についても「われわれは問題を解決したというよりも、むしろ解決が不要であることを証明したのである。」と。Schumpeter, J.A. *Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie*, Duncker & Humblot, 1980 S. 94f. (大野忠男・木村健康・安井琢磨訳『理論経済学の本質と主要内容(上)』岩波文庫, 1983 年, 176-178 頁), また、『経済分析の歴史』では経済に登場する個人を市場に限って「方法論的個人主義」としている。これはメンガーが掲げる「人間の生命と福祉の維持」という視点にはない。 *History of Economic Analysis*, Oxford University Press, Inc. 1954, (George Allen & Unwin Ltd, 1972), pp. 888-889. (東畑精一訳『経済分析の歴史 5』岩波書店, 1958 年, 1880 頁)
- 47) *KrV*, S. B834. (『純粹理性批判(下)』2014 年, 456 頁)
- 48) *GV*, S. 30f. (『国民経済学原理』28 頁)
- 49) この全体論的なアプローチは経済学にごく自然な形と言えよう。スミスから始まる正統学派、それを引き継いできたマーシャルのケンブリッジ学派に共通項を見いだそうとするなら、この全体論、演繹的アプローチは明らかである。言葉を換えれば、経済学は何れもか厚生を含意している。厚生経済学は経済学に厚生を際立たせたのである。現れるべくして現れた厚生経済学はピグーに現れた。その全体論は今度はケインズのマクロ経済学として現れた。所得変動をもって政策を意義づけたケインズと福祉を経済学に据えたピグーには経済学に全体論を取り入れたという意味で軌を一にしている。その意味であらためてメンガーが掲げる演繹論の経済学とピグーが掲げた厚生経済学を比較することは意義のあることであろう。もとより、厚生経済学はロビンズ (Robbins, L.) の批判から新厚生経済学として生起する。それはロビンズの批判にある。「国家財政の理論の中、『社会的効用』を取り扱うすべての部分は異なった意義をおびなければならぬ。それは倫理的な仮定の発展としては興味あるものであるが、純粹理論の実証的な仮定からは全然でこないものである。それはたんに、イギリス経済学と功利主義とが歴史的に連合した結果の偶然の沈殿物なのである。」そしてロビンズは「経済学は、その存在のためにはなくとも少なくともその意義のために、まさに究極の価値判断—合理的なこと、および、知識をもって選択しうることが望ましいという断言—に依存する。」として全体論

経済学とアナロジー（山崎）

- を位置づける。Robbins, L. *An Essay on the Nature and Significance of Economic Science*, Macmillan, 1932, p. 141, p. 157. (中山伊知郎監修・辻六兵衛訳『経済学の本質と意義』東洋経済新報社, 1957年, 212頁, 237頁)
- 50) *GV*, S. 34. (『国民経済学原理』31頁)
- 51) Arrow, K.J. *Social Choice and Individual Values*, 2nd Edition, Cowles Foundation for Research in Economics at Yale University, 1936, p. 59. (長名寛明訳『社会的選択と個人的評価』日本経済新聞社, 1977年, 94-95頁)「定理2(一般可能性定理): 社会の構成因がいかなる仕方でも自由に順序づけうる選択対象が, …存在する場合, …社会的厚生関数はどれも賦課的となるか独裁的にならざるをえない。」
- 52) Harrod, R.F. *Sociology, Morals and Mystery*, The Macmillan Press Ltd, 1971, p. 77. (清水幾太郎訳『社会科学とは何か』岩波新書1975年, 157-158頁)
- 53) 哲学的に言えば, そもそも人間を科学の対象とすることは禁じ手であり, できない。そうではなく, 経済学が人間の科学として意識しなければならないことを意味する。
- 54) この演繹は帰納論理学(形式論理学や記号論理学)が展開する, 帰納対演繹の演繹ではない。近世の哲学者, ヒュームやカントが基礎においた基盤的方法と言えよう。
- 55) *GV*, S. 86. (『国民経済学原理』75頁)
- 56) *CRS*, pp. 146-147. (『科学による反革命-理性の乱用-』115頁)
- 57) *CRS*, p. 147. (『科学による反革命-理性の乱用-』120頁)
- 58) Popper, K. *Open Society and its Enemies*, Routledge, 1995, pp. 459-460 (武田弘道訳『自由社会の哲学とその論敵』世界思想社, 1973年, 366-367頁)
- 59) Hayek, F.A. *Studies in Philosophy, Politics and Economics (The Theory of Complex Phenomena)* The University of Chicago Press, 1967, p. 94. (嶋津格監訳『ハイエク全集Ⅱ—4 哲学論集』22頁)
- 60) Hayek, F.A., *Ibid.*, pp. 22-23. (杉田秀一訳『複雑現象の理論』, 『現代思想【特集】ハイエク』1991年, 青土社に所収, 122頁)
- 61) Smith, A. *Essays on Philosophical Subjects*, Liberty Fund Indianapolis, this reprint has authorized by the Oxford University Press in 1980, p. 33. p. 40. p. 51. (水田洋ほか訳『アダム・スミス哲学論文集』名古屋大学出版会, 6頁, 14頁, 32頁)
- 62) *CRS*, p. 81. (『科学による反革命-理性の乱用-』57-58頁), 同様な記述が『個人主義と経済秩序』にも見られる。*IEO*, p. 62. (嘉治元郎・嘉治佐代訳『個人主義と経済秩序』85-86頁) またこの言説はマッハにも見られる。Mach, E. *Die Analyse der Empfindungen*, Verlag von Gustav Fischer, 1922, S. 10f. (須藤吾之助/廣松渉訳『感覚の分析』法政大学出版局, 1976年, 12-15頁)
- 63) *ARISTOTELOYS TA META TA PHYSIEK*, p. 1003b1, p. 1048b1. (出隆訳『形而上学(上)』112-113頁, 『形而上学(下)』33頁, 岩波文庫, 1960年)
- 64) Kant, I. *Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können*, Philosophische Bibliothk, S. 124. (篠田英雄訳『プロレゴメナ』岩波文庫, 224-225頁)

- 65) Popper, K.R. *The Logic of Scientific Discovery*, Hutchinson Education 1959 (Reprinted by Routledge 1992), It is the problem of cosmology: *the problem of understanding the world—including ourselves, and our knowledge, as part of the world.* - p. 15.
- 66) 田中美知太郎・藤沢令夫・森進一・山野耕治訳『国家』（『プラトンⅡ—世界の名著 7—』中央公論社, 1978年, に所収）, 234-246頁 「それならば, この太陽が〈善の生み出したもの〉…。〈善〉は, これを自己と同じ比をもつものとして生み出したのだ。つまり, 〈善〉が, 知られる場（可知界）のうちにあつて, 〈知るもの〉と〈知られるもの〉とに対してもっている関係は, 見える場（可視界）において太陽が, 〈見るはたらき（視覚）〉と〈見られるもの〉とに対してもっている関係なのだ…」 235頁
- 67) 相違と言えば, ヒュームが功利主義という外面性で迫ったのに対して, カントは主観に反功利主義的に迫ったと言えよう。しかしその相違も社会的演繹の包括性に消えてしまう。
- 68) 石川文康は「人間理性の立法」の意味は「理念に従って, 自己自身と争う理性のための『一個の法廷』として企てられたことに基づくものである。」と。石川文康『カント第三の思考—法廷モデルと無限判断—』名古屋大学出版会, 1996年, 3頁
- 69) *LLL1*, p. 36. (矢島鈞次・水吉俊彦訳『法と立法と自由Ⅰ』春秋社, 49頁)
- 70) *K_vV*, S. B304. (篠田英雄訳『純粹理性批判（上）』岩波文庫, 328頁)
- 71) *K_vV*, S. B317. (『純粹理性批判（上）』348頁), *KU*, S. XXVI. (篠田英雄訳『判断力批判（上）』岩波文庫, 36頁)
- 72) *KU*, S. v, S. 183. (『判断力批判』14-15頁)
- 73) *HH*, pp. 139-140. (嶋津 格訳『ハイエク, ハイエクを語る』名古屋大学出版会, 177-178頁)
- 74) *IE*, p. 54. (嘉治元郎・嘉治佐代訳『個人主義と経済秩序』春秋社, 70頁)